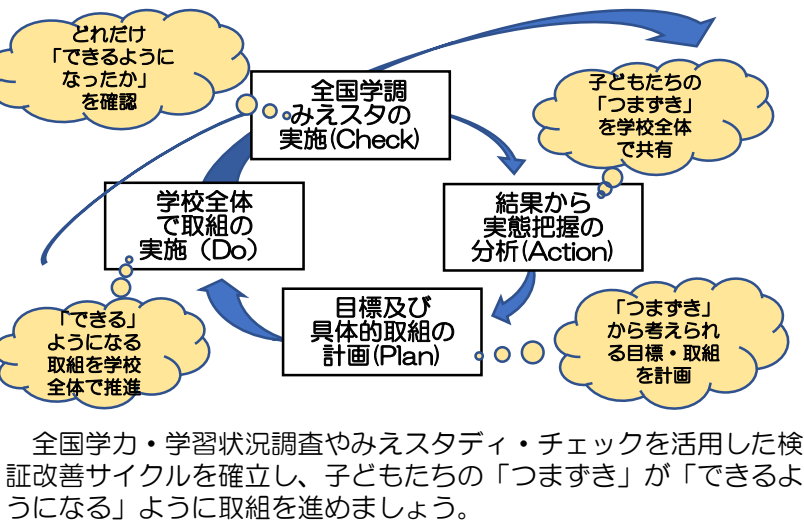


令和7年度全国学力・学習状況調査 結果分析【津市詳細版】

1 調査の概要

- (1) 調査の目的
津市教育委員会及び学校が、学習指導要領に示している資質・能力の獲得状況について、全国的な状況との関係において自らの教育及び教育施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、教育に関する継続的な**検証改善サイクル**を確立します。市内のすべての学校が、各児童生徒の学力及び学習状況をより客観的に把握し、児童生徒への教育指導や学習状況の改善等に役立てます。
- (2) 実施日
令和7年4月17日（木）
＜オンライン方式＞
令和7年4月14日（月）～17日（木）のうち、指定日 ＜筆記方式＞
- (3) 調査実施人数(津市)
小学校第6学年児童 約2,000人
中学校第3学年生徒 約1,900人
- (4) 調査内容
国語、算数・数学、理科、質問調査

検証改善サイクルの確立

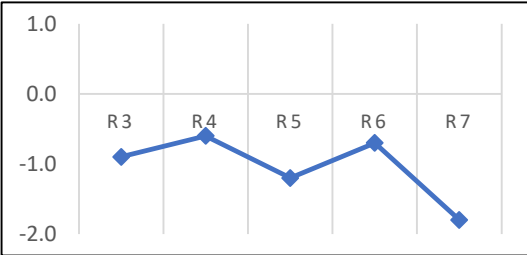


2 平均正答率推移 (R7中学校理科は平均RTスコア)

小学校	令和3年度		令和4年度		令和5年度		令和6年度		令和7年度	
	津市	全国	津市	全国	津市	全国	津市	全国	津市	全国
国語	64	64.7	65	65.6	66	67.2	67	67.7	65	66.8
算数	68	70.2	62	63.2	61	62.5	62	63.4	56	58.0
理科			62	63.3					55	57.1

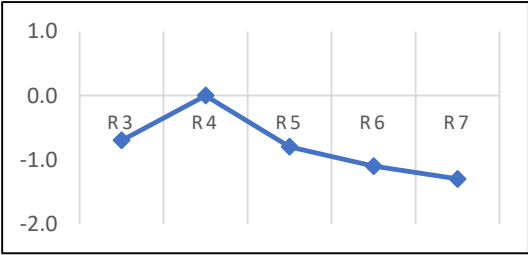
中学校	令和3年度		令和4年度		令和5年度		令和6年度		令和7年度	
	津市	全国	津市	全国	津市	全国	津市	全国	津市	全国
国語	64	64.6	69	69.0	69	69.8	57	58.1	53	54.3
数学	59	57.2	53	51.4	51	51.0	53	52.5	47	48.3
理科			49	49					49.4	50.3

小学校 国語

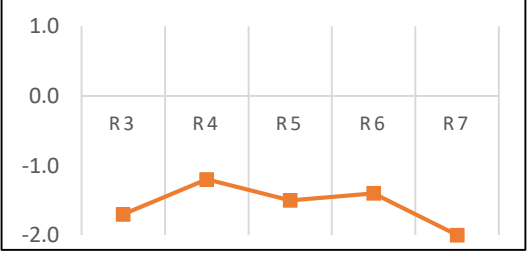


全国差 推移

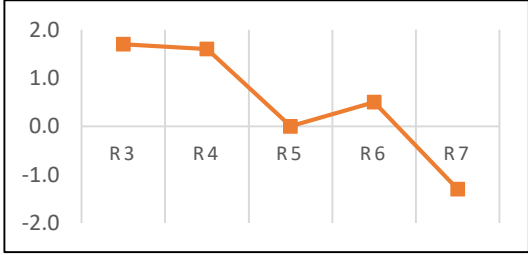
中学校 国語



小学校 算数



中学校 数学



3 各教科 全国より正答率が低い問題や正答率自体が低い問題について



国立教育政策研究所
教科に関する調査結果

小学校

国語

32(2) (正答率48.2% 全国差▲3.1 無回答1.9%)

事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができるか

【第5・6学年 思考力、表現力、判断力等 C読むこと】

資料を読み、【木村さんのメモ】の空欄に当てはまる内容として適切なものを選択する問題です。

事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することに課題が見られました。

学習指導においては、【木村さんのメモ】のように、書き手がどのような事実を理由や事例として挙げているかを書き出し、書き手の考えを自分の言葉で短くまとめるなどして、内容の中心となる事柄などを捉えることができるよう指導することが必要です。

参考：国立教育政策研究所 報告書（小学校 国語）P64



国立教育政策研究所
解説

算数

2(2) (正答率42.3% 全国差▲7.9 無回答0.6%)

台形の意味や性質について理解しているか

【第4学年 B 図形】

方眼上に描かれた5つの図形から、台形を選ぶ問題です。図形5のように、上下に向かい合った一組の辺が平行で、かつ上の辺が下の辺より長く、直角をもつ四角形を台形と捉えることに課題が見られました。学習指導においては、例えば、置き方をいろいろと変えて示されたいくつかの四角形の中から台形を弁別し、その理由を説明する活動において、図形を構成する要素及びそれらの位置関係を着目させることで、置き方を変えても図形の性質は変わらないことを理解できるようにすることが大切です。

参考：国立教育政策研究所 報告書（小学校 算数）P48～50



国立教育政策研究所
解説

理科

3(1) (正答率62.7% 全国差▲8.0 無回答率1.5%)

ヘチマの花のつくりや受粉についての知識が身に付いているか【第5学年 B 生命・地球】

この問題は「花のつくりや受粉」に関する出題であり、基本的な理解は一定程度見られるものの、「受粉」という科学的な言葉を用いて説明する力に課題が見られました。おしべやめしべの部位や名称は分かっているが、花粉がめしべの先につくことを「受粉」と書けなかった児童が23.0%と、誤答の中で最も多い結果となりました。

学習指導においては、観察や実験を通して得られたことを科学的な言葉で表現することが重要です。また、図鑑で花の部位を確認させたり、受粉の実験で「受粉」という言葉を繰り返し使わせたりして、知識を確実に定着させることが大切です。

参考：国立教育政策研究所 報告書（小学校 理科）P47～48



国立教育政策研究所
解説

中学校

国語

33 (正答率57.0% 全国差▲4.0 無回答率1.2%)

事象や行為を表す語句について理解しているか

【第1学年 知識及び技能】

この問題は「事象や行為を表す語句の理解」に関する出題であり、「しきりと」の意味を文脈に即して捉える力が十分でなく、辞書的な意味とのつながりを理解することに課題が見られました。語句の意味を推測する際に、文脈を広く捉える力や、語感に基づいて判断する力が弱いことが考えられます。

学習指導においては、様々な語句について取り上げるとともに、語句を単独で覚えるだけでなく、文章の中でどのように用いられているかを意識することが大切です。特に、「しきりと」のように抽象的・多義的な副詞は、具体的な場面や他の用例と結び付けて理解を促すことが求められます。

参考：国立教育政策研究所 報告書（中学校 国語）P57



国立教育政策研究所
解説

数学

5 (正答率39.6% 全国差▲2.9 無回答率7.9%)

不確定な事象についてデータに基づいて考察する場面において、数や式、表、グラフなどを活用して、数学的に処理することや相対度数の意味を理解しているか【第1学年 D データの活用】

40人のハンドボール投げの記録をまとめた度数分布表から、20m以上25m未満の階級の相対度数を求める問題です。数学の用語の意味の理解に課題が見られました。不確定な事象についてデータに基づいて考察する場面では、度数分布表やヒストグラムなどを用いて、データの特徴や分布の傾向を読み取ることが大切です。大きさの異なる複数のデータの分布の傾向を考察する活動を設定し、ある階級の度数の総度数に対する割合を求めて比較する場面を取り入れることを通して、相対度数の必要性和意味について理解できるように指導することが必要です。

参考：国立教育政策研究所 報告書（中学校 数学）P34～36



国立教育政策研究所
解説

理科

1(2) (正答率40.0% 全国差▲6.2 無回答率9.3%)

身の回りの事象から生じた疑問や見いだした問題を解決するための課題を設定できるか【第1分野 (2) 身の回りの物質】

理科の実験では、なぜ水道水ではなく精製水を使用するか、この疑問を解決するためにどのような課題にすればよいかを答える問題です。

見通しをもって科学的に探究をするためには、疑問や見いだした問題から解決するための課題を設定することが大切です。指導に当たっては、身の回りの事象から生じた疑問や見いだした問題が解決できるかどうかに着目し、解決可能で科学的な探究の課題を自分の言葉で表現する学習場面を設定することが必要です。その際、生徒が疑問や問題から自分の言葉で課題を表現し、見通しをもって探究できるようにするために、「課題の把握」の段階で生徒が疑問や問題を見いだしやすい自然の事物・現象を提示することが重要です。

参考：国立教育政策研究所 報告書（中学校 理科）P32～34



国立教育政策研究所
解説

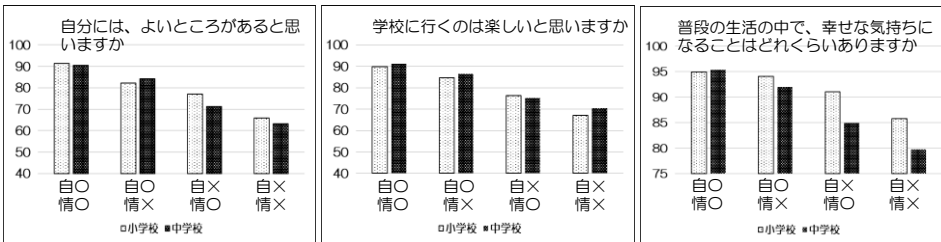
4 児童生徒質問調査について

- ※1 「自○情○」とは、自己調整する力と情報活用能力に関して、肯定的回答を示したグループ
 ※2 数値は「1時間以上」と回答した割合

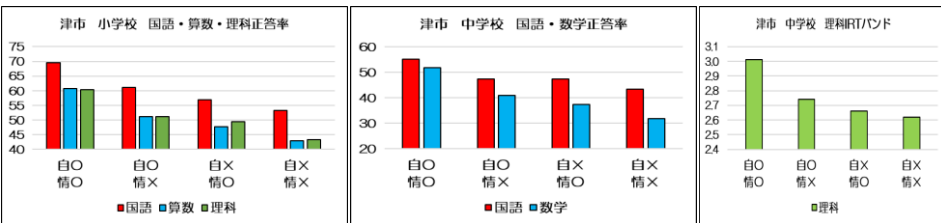
(1) 「自己調整する力」×「情報活用能力」×「ウェルビーイング」



本市において、自己調整する力「(16)分らないことやくわしく知りた
 いことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできています
 か」と情報活用能力「(29-4)あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機
 器を使って学校のプレゼンテーション（発表のスライド）を作成することが
 できると思いますか」に関する2つの質問項目において、肯定的に回答した
 児童生徒ほど、「自分には、よいところがあると思う」「学校に行くのは楽
 しい」「普段の生活の中で、幸せな気持ちになる」のいずれの項目につい
 て肯定的に回答した割合が高くなります。また、両方に肯定的に回答したグ
 ループ（自○情○）（※1）がすべての項目において割合が最も高くなりま
 した。なお、この結果については全国でも概ね同様の結果が見られます。



また、正答率のクロス集計を行うと、次のように両方に肯定的に回答した
 グループ（自○情○）の正答率の割合が最も高くなりました。



自己調整する力が高い児童生徒は、情報を整理、取捨選択して学習に活用
 できる傾向が高く、学習の見通しをもって、課題を乗り越えられる経験が多
 いため、結果的にウェルビーイングが向上しやすいと考えられます。

情報活用能力は、これからの社会を生き抜いていくために
 重要な力となります。ICT機器の活用にとどまらず、他者との
 対話や教科書、資料集などから得られる情報を活用することも、
 情報活用能力の重要な側面です。課題の設定やふり返しなど自己
 調整的な活動とあわせて取り入れ、授業改善につなげていき
 ましょう。

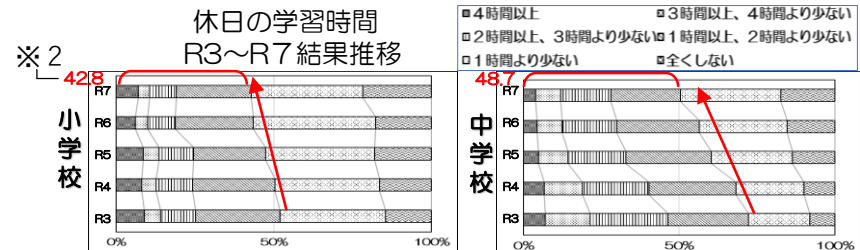
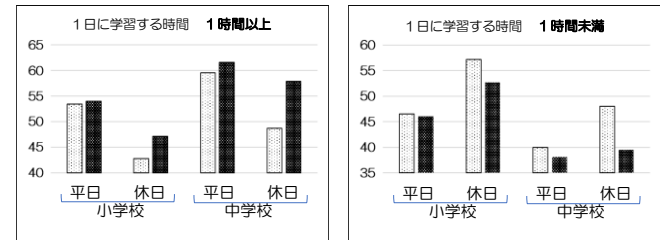


国立教育政策研究所
 質問調査の結果について

(2) 学習習慣



本市の結果から、子どもたちの家庭学習時間が全国と比べて少ない傾
 向が明らかになりました。



平日の学習時間では小学校が全国平均より0.6ポイント、中学校が
 2.1ポイント下回り、休日の学習時間においては小学校で4.3ポイント、
 中学校で9.2ポイントも低い結果となっています。さらに、「休日に学
 習を全くしない」と回答した割合は、小学校では21.8%、中学校で
 は16.8%と、およそ5人のうち1人は、平日の授業の予習復習等をす
 ることなく休日を過ごしていることが分かりました。

学力を確実に定着させていくためには、授業時間だけでなく「家庭で
 の学習」が欠かせません。本市が作成した「家庭学習マニュアル」でも
 示しているように、家庭学習には以下の大切な役割があります。

- ・授業で学んだ知識・技能を定着させること
- ・学びを日常生活につなげること
- ・授業では時間の制約や一人ひとりの課題に十分に対応できない部
 分を補うこと
- ・教科の枠を越え、知識や技能を活用できる場を広げること など

一人ひとりの子どもが、自ら学びを深め、将来に
 生かしていける力を育むために、学校・家庭が一体
 となって「家庭学習の充実」に取り組んでいきま
 しょう。



津市家庭学習
 マニュアル

4 児童生徒質問調査について

※3 数値は肯定的回答の割合 ▲はマイナス

(3) 挑戦心、自己有用感、幸福感等

※3

質問番号	質問事項	津市	県	全国	全国差	R6津市との差
小 5	自分には、よいところがあると思いますか	84.3	85.1	86.9	▲2.6	2.5 ↑
中 5		83.6	86.8	86.2	▲2.6	1.6 ↑
小 6	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか	91.9	92.5	92.2	▲0.3	2.9 ↑
中 6		91.3	92.7	92.2	▲0.9	0.9 ↑
小 10	困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか	67.8	69.5	70.6	▲2.8	5.3 ↑
中 10		71.6	73.5	73.2	▲1.6	3.7 ↑
小 12	学校に行くのは楽しいと思いますか。	84.7	85.0	86.5	▲1.8	0.2 ↑
中 12		85.7	87.4	86.1	▲0.4	1.8 ↑
小 14	友達関係に満足していますか	92.4	92.2	91.7	0.7	0.6 ↑
中 14		90.3	91.6	91.4	▲1.1	0.9 ↑
小 15	普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか	93.2	93.1	93.0	0.2	0.9 ↑
中 15		91.3	91.9	91.6	▲0.3	1.9 ↑

上記のすべての項目について、R6の結果と比較して上昇しており、肯定的に回答している児童生徒は正答率が高い傾向があります。努力や成果を認められる安心感と、失敗を恐れず挑戦できる環境が、子どもの自己肯定感を高めます。成果だけでなく挑戦の姿勢そのものを評価するなど、児童生徒への言葉かけを意識していきましょう。

(4) ICTを活用した学習状況

※3

質問番号	質問事項	津市	県	全国	全国差	R6津市との差
小 28	【ICTを活用した学習】5年生（2年生）までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか（週3回以上）	89.1	78.3	71.7	17.4	9.3 ↑
中 28	【「ほぼ毎日」回答比較】（全国比）小学校+2.8、3、中学校+3.2、0	94.8	88.1	76.5	18.3	5.7 ↑

ICT機器の使用頻度に対する質問について、小・中学校ともに週3回以上と回答する児童生徒の割合が全国より17ポイント以上上回りました。

ICT機器の使用頻度やICT機器を活用する自信がある児童生徒ほど、各教科の正答率・スコアも高くなる傾向があります。さらに、ICT機器を活用する自信がある児童生徒ほど、探究的な学びに取り組んだと回答していることから、今後もICT機器を積極的に、効果的に活用した授業を展開していきましょう。

(5) 持続可能な社会の創り手の育成に向けて

※3

質問番号	質問事項	津市	県	全国	全国差	R6津市との差
小 27	地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。	81.9	82.0	81.3	0.6	82.8
中 27		74.9	77.4	75.3	▲0.4	73.9

上記の項目について、昨年度より低下しました。持続可能な社会の創り手となる自立した人づくりをめざすため、さらに学校と家庭や地域、関係機関等が連携し、子どもの探究的な学びの実現に向けた取組を進めていきましょう。

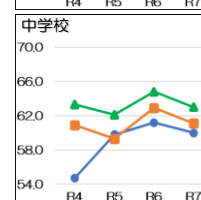
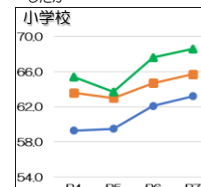
(6) 主体的・対話的で深い学び

※3

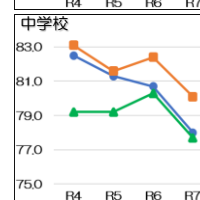
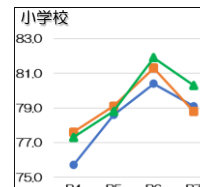
●津市 ■県 ▲全国

主体的・対話的な学びについて、令和4年度より、各校で取組を進めている質問項目です。全国との差はあるものの、概ね上昇し、授業改善の一定の成果が表れていると考えられます。この質問項目に肯定的な回答をした児童生徒は正答率が高い傾向にあります。

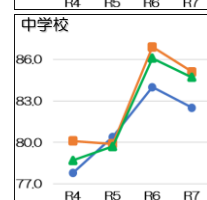
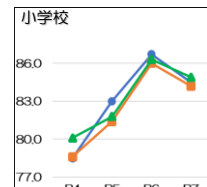
(31) 5年生まで（1、2年生のとき）に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか



(32) 5年生まで（1、2年生のとき）に受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたか



(35) 学級の友達との間で話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたり（広げたり）することができていますか



主体的・対話的で深い学びに関する回答と挑戦心・自己有用感・幸福感等に関する回答には相関関係が見られ、主体的・対話的で深い学びが、児童生徒の挑戦心・自己有用感・幸福感等に影響を与えている可能性があります。5(1)にあるように、自己有用感・幸福感等が継続的に上昇していることから、両者は相互に作用し合い、学習意欲や学力向上にも波及効果をもたらします。引き続き、児童生徒が「学ぶ楽しさ」、「自分の力を発揮できる」と感じられるような授業改善に努めましょう。

5 今後の改善方策 自校の分析について

今年度も全校で児童生徒質問調査を活用した取組を実施します。継続して重点的に取り組んでいる「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に関する取組について、各校の昨年度の取組状況や今年度の取組内容を記入してください。また、それ以外の質問項目で、自校の強み・弱みを把握し、取組を進めましょう。

右の二次元コードから国立教育政策研究所のサイトにアクセスできます。国立教育政策研究所作成の報告書には、調査の概要や調査結果、各問題の分析結果と課題、授業アイデア例が掲載されています。調査結果から自校の成果と課題を把握し、授業改善に役立てましょう。



国立教育政策研究所

【〇〇学校】児童生徒質問調査を活用した取組について【津市版】（継続2-1）

質問項目	昨年度	今年度	変化	コメント
1. 主体的・対話的で深い学びに関する取組	85.0	88.0	▲3.0	主体的・対話的で深い学びに関する取組を進め、児童生徒の学びの深まりを図る。
2. 挑戦心・自己有用感・幸福感等に関する取組	82.0	85.0	▲3.0	挑戦心・自己有用感・幸福感等に関する取組を進め、児童生徒の学びの深まりを図る。
3. 持続可能な社会の創り手の育成に関する取組	81.0	84.0	▲3.0	持続可能な社会の創り手の育成に関する取組を進め、児童生徒の学びの深まりを図る。
4. その他	80.0	83.0	▲3.0	その他に関する取組を進め、児童生徒の学びの深まりを図る。

※調査結果はあくまで参考です。各校の実情に応じて活用してください。また、各校の実情に応じて活用してください。